



営農NEWS



長雨、日照不足による農作物への影響を出来るだけ軽減する対策に努めましょう

今年は 7 月下旬から天候不順で、降雨日が多く、日照時間の少ない日が続いています。8 月 10 日発表の気象 1 ヶ月予報によりますと、「天気は、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。降水量は、平年並または多い確率とも 40%です。日照時間は、少ない確率 50%です」となって、今後ともこの影響は継続する予想となっています。

このため、今後、収穫期に入る水稻、生育初中期のダイズ、施設抑制キュウリやトマト、育苗期や定植期の露地秋冬野菜などへの影響を出来るだけ軽減させる対策を積極的に実施するよう努めてください。

1 水稻

生育の遅い品種や飼料稲などでは、穂いもちの発生が懸念されます。穂いもちの防除適期は、穂ばらみ末期～穂揃期ですので、葉いもちが上位葉まで多発している水田では、薬剤の収穫前日数などに留意して防除を徹底してください。

あきたこまちでは収穫期に入りますが、天候が回復し、作業が可能になれば、乾燥機の能力に合わせて、速やかに収穫してください。収穫時には損傷粒の発生がないように、こき胴の回転数を遅くするなどの調整や、収穫後は長時間放置せず、速やかに（4 時間以内に）乾燥作業に入ります。高水分籾の場合、無加温の通風乾燥から開始し、徐々に加温して穀温 40℃以下で乾燥させます。急激な乾燥は、胴割米の原因となりますので避けてください。

また、倒伏した部分は、出来るだけ別収穫として品質低下を避けてください。

2 ダイズ、そば

土壌の過湿が続くと生育が不良になるため、圃場の排水対策が必要です。排水溝などの清掃や地表水を排水するために、圃場周囲や圃場内に一定間隔で明渠を作り、圃場排水を促します。

また、茎葉が軟弱になり、病害が発生しやすくなるため、必要に応じて殺菌剤による防除に努めてください。

3 施設野菜（キュウリやトマトなど）

施設内が過湿で日照不足のため、茎葉が軟弱徒長になりやすくなっています。施設内に滞水するような場合は、施設周囲に明渠を掘るなど圃場排水に努めます。灌水は必要に応じて控えめに行い、夕方の灌水は避けます。また、適切な肥培管理に努め、草勢が弱っている場合は、葉面散布などで回復を図ります。乱形果や病害果などは早めに摘除し、着果負担の軽減と病害の防止に努めます。

なお、摘果や整枝などの管理作業は、出来るだけ晴天の日に行い、湿度が高い曇雨天の日に行うと、傷口から病原菌が侵入して発病する恐れがありますので、注意が必要です。

4 露地野菜（秋冬野菜）

1) 土壌水分が長期に加湿状態となれば、生育不良、草勢低下しやすくなります。また、土壌病害や茎葉病害も発生しやすくなりますので、過剰な水分の除去と地下水位を下げるために、圃場周囲や圃場内に一定間隔で明渠を作り、圃場排水を促します。

2) 大雨で滞水した畑においては、早急に排水するよう促し、作物に付着した泥はできるだけ落として、損傷した茎葉を可能な限り取り除きます。さらに、土壌の乾き具合や作物の草勢を観察しながら、必要に応じて追肥や液肥の葉面散布などを行います。特に、露地野菜が強風雨にたたかれると、病害発生の原因となりますので、必要に応じて殺菌剤の散布を行い、病害防除に努めます。

3) 育苗中の苗においても、育苗場所が多湿になると、べと病や細菌性の病害などが発生しやすくなります。育苗中は適度なかん水に努め、過湿、過乾燥にならないようにします。また、生育に応じてポットやトレイのずらしを行い、通風、採光を良好に保って健苗な株を育てます。常に、病害の発生を注意深く観察し、確認したときは早急に防除を行ってください。なお、散布後には必ず防除効果を確認して、次の防除の参考にします。

5 果樹（ナシ、ブドウ、カキなど）

降雨が続くと、各種病害の発生が懸念されますので、果樹病害虫参考防除例を参考にして、雨の合間をぬって確実に薬剤防除を徹底してください。また、多雨により果樹園が湛水した場合には、速やかに溝掘りをして、園外に排水するようにします。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040